

假字考

上卷

W52-2

O 38

1



カナモジカ人氏寄贈

58017

假字考叙

遍照空海氏嘗以四十字母課
和歌草書作之。以便於幼學
焉。上自公卿大夫子弟。下至於閭
巷兒女子。皆莫不誦此而學之
矣。然幼童顓蒙。不辨書法。字體

失本。從形摸影。追影索陰。鵲
突模糊。秋蚓折釘。纒戾殊甚。
幼童受誤。白首傳弊。彼此因循。
古今訟襲。殆不可讀者有焉。
雖學士大夫。以此既為俗間
通用之體。置而不論之矣。異邦

通用之體。置而不論之矣。異刊

真字序二

之人見以為我東方之國字。
蔑視而棄之。豈不亦痛哉。岡
田真澄精國學。兼善和歌。乃
因其力以窮空海假字之所本。
又質其草體字形之所出。遂辨
後世所傳受之訛誤。正俗間所習

用之妄謬。本字下每引韻書以
尋音訓之原。別開上格摘法
帖而舉草體之變。及其引證浩
博。考訂詳覈。可謂無餘蘊
矣。又揭古人考正之誤。指摘其
疎漏而辨之。考正之義。我其不苟。

距淵而剝之。老正之義。我其不苟。

真字序三

者如此。真澄寒泉先生之嗣子也。先生以通濂洛關閩學為關東霸府之侍講。真澄以先生之嗣人能讀其所遺書。嗚呼其博弘廣文蓋本乎此。

壬午孟陬上元之日

鵬齋老人與撰



宋人論其少時讀書
聞其讀書必不讀書
其少時讀書必不讀書
其少時讀書必不讀書
其少時讀書必不讀書

假字考序
その世に於てあるといふ者の数は
乃ち多かるべし。然るに其の
はたしきもの原の久しきもの
つものたれは、あるあるを
よめり。其人たるもの、
此の世に於て、
此の世に於て、

えぬちと路をふりてあふくまふれあ
きふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり

少長之
年
子
子
子

孝に親を奉るを孝と云ふ

[illegible]

素行文の正多書に多流

九例一

九例

○ 凡そ此書老幼稚能人下依其源を羅き本
多能略本を金くわすの考枚一五く市の
書を合入る明なる一所の五種の書といはる
本朝書話とくわし國人の書論といふ一場の説
話とくわし國史といはる物語歌集といはる
字源字小といはる文字とくわし加字といはる
類ハ墨硯
残筆とくわし偽書といはる筆とくわし二ハ本朝墨
硯とくわし古人の書といはる筆とくわし鐘
の款其外度といはる書とくわし時代字論といはる
字源集ハ古人ののれとくわし筆とくわし横
字とくわし筆とくわし筆とくわし筆とくわし筆

社をいふとふれりては二書と八那

しぬるあり

○ 凡此書又之將一未就序次之楷書を其先
一はく行書其後假字を以て楷書を志するに
て其楷書より出づる篆書より出づるもの
なり。云説表早より心傳てけは全く篆文
哉。とて楷より出づる文より出づる九
篆より出づる楷より出づる九あり假説
字おそく新楷書小字止なり。其篆書より出づる
一表より出づる一はく心傳てけは全く篆文
楷書より出づる一はく心傳てけは全く篆文
て其より出づる一はく心傳てけは全く篆文

て其より出づる一はく心傳てけは全く篆文

小真生行行生草真如立行如行草如走
未有不能立能行而能走者也了宋郭
忠恕の云く小篆散而八分生八分破而
隸書出隸書悖而行書作行書狂而草書
聖に表あまき楷行を以て筆をむは論をへる
以てよくある金くその書の論より此書の趣と
する所をみくに略す予友外岡小海の字を稱と
し草書は安く論をわいよくやと偽字哉論する
書されを是の如くも止る字をさる又其の字
論は其の篆書を出しあらむ時わくその為
ひその心はらるる如くはたきしめ近き行書を出

くそく
楷書（いさうの）なり
論授字を其

五

の法帖よりぬれ偽字款識を以て之

論中同體ののれりていさの常とをこそわく
たハ偽字類稱トハ
上下の言ヲ連れる常とこそ體の表れ
免る事ハ偽字格ナリ

○ 訖中梵字及人書本の訖新記を八本朝
書話に訖る

○ 凡倭字中聲ハある安阿のゝにゝゝ 𪛗𪛗を
 阿とてゝゝ以のゝ聲と 𪛗異已の外の音訓
 能倭字をあふねく 𪛗ハはむりも童幼のゝふ抑
 ゝゝの倭字のゝゝの倭字ハ聲との誤を以て
 𪛗のゝをねるゝの倭字のゝゝのゝゝぬゝゝ

作きよなる倭字類集をいふなり

○ 論中古人を稱するは稱又ハ字號をいふなり稱
あるを稱し實名をいふは稱又ハ字號をいふなり稱
をいふは稱するなり實名をいふは稱又ハ字號をいふなり稱
あるは稱し實名をいふは稱又ハ字號をいふなり稱

○ 凡論中諸説字にありては其書の時代年曆を
いふは其書の時代の年曆をいふなり稱又ハ字號をいふなり稱
あるは稱し實名をいふは稱又ハ字號をいふなり稱

○ 凡此の如く人の書を稱するは其書の時代の年曆を
いふは其書の時代の年曆をいふなり稱又ハ字號をいふなり稱
あるは稱し實名をいふは稱又ハ字號をいふなり稱

世を越る乃て花をさやうにさくハ人を
はるやう事と人ハ身を清く居る事と
多九死をうたふや事なるなり世を越る
ハさきくは二巻にはなりぬかて老翁と
能く人ハわれ及のよたあをくらぬ
一巻の事とあむをいのハき事

又政子の一源と源初おれをねをさく
とく

○安之部

安 安 安

安 安 安

安 安 安

假字考卷之上

岡田真澄著

○あ

○ア

○あ

安 安 安

かくみく
ごく

まける
たけり

○あ

ハ 阿

之音也 唐韻 集韻 韻會
正韻並於何切音嬰

秋已
秋上

あ
あ
あ

あ
あ
あ
古
今

古已
今上



阿

ての
ての

已上一の古
秋萩し今

了今

○
ア

八 阿
阿 何

この如く
ての
将一未礼

之省文也。○真澄
前年見之古抄本

下
書

タル
アリ

澤元愷

模微字說
已下倣之

云古書多作力卽

安字草體之省耳易與力之爲加相

混故後皆作ㄚ在古者則ㄚ者凡之

省音弥與今不同也

眞
劉
著

真澄按二古抄本下卜書夕儿ハ

卦字共真澄按二古抄本下ト書タルハ

上ノ二

有力ト書タル事更ニ無三ノ片

假字ヲアト書ル論ハ此次三ノ

部ニ云ヘシ易與力之為加相混

故後作アト云シハ巧ニ人ヲ欺

久妄說笑ヘシ

◎伊呂波字考錄僧全長著云萬葉假

字遣作者未詳アハ安ノ畧ト云又

万葉色葉作者未詳アハ阿ト書註

○以之部

ㄨ ㄣ
ㄨ ㄣ
ㄨ ㄣ
秋 已
菽 上

二安ト取タルカ

○真澄按二阿ノ扁下ナルヲ下ト書

○此體ヨリ取タル也安ノ畧ト云ハ

甚ムツカレクシテワロシ從ヘカ

ラス

○

○イ

○

ハ
以

之音也
並養里切怡上聲

韻會
正韻

以

廣韻 于準切 集韻 韻會 庚準
切並音允此全文卜云說非也

○
工

己上
古今

○盈
乃乃

重百 已上

之吳音也。唐韻集韻並於希切音依韻會。

衣

のく乃ち
 元
 と松
 及

よ書ハ第ニ
遠人古人
と云ふれ又いふ
らばそハ偽字類
我ニ下

○ 志溪樓子系釋文雄兄

訓也唐韻許榮
切集韻韻會正

鏡韻呼榮切競上聲○新撰字の字な

雁ねいしり然る兄をこの依りよ

用るに古書番々何れも之を兄

石上論

音訓片假
字之處二

一 此の如く俗字をもちて

唐韻 愚袁
切音原

の字はまゝお

之より誤なり音訓もな

と^エ川魚きよなりあき

人ハ常ニ我々ト云フナリ

大乃也るまゝふれ

上ノ五

於之俗字音也 **唐韻** 衰都切 **集韻** 韻會 **正韻** 汪胡切

杉上
秋菴

お
お
吉巳上今

レ片假字ハ俗字ノ於ヨリ省文セ

○加之部

カ^{己上}カ^{己上}カ^{己上}カ^{己上}

カ^{己上}カ^{己上}カ^{己上}カ^{己上}

○可^{己上}可^{己上}可^{己上}可^{己上}

可^{己上}可^{己上}可^{己上}可^{己上}

可^{己上}可^{己上}可^{己上}可^{己上}

レコト明ナリ

○カ

◎カ

○カ

加^{之音也}加^{之音也}加^{之音也}加^{之音也}

○ハ

可^{之音也}可^{之音也}可^{之音也}可^{之音也}

可^{之音也}可^{之音也}可^{之音也}可^{之音也}

之音也唐韻古牙切並音家

之音也唐韻肯我切並音圻

可^{之音也}可^{之音也}可^{之音也}可^{之音也}

のりりり
己上
古今

○閑
一木

一木

己上
秋菰
一木
今古

○幾之部

一木

○系

ハ閑

之音也 唐韻 戸間切 集韻 韻會 何間切 正韻 何艱切

○力

ハ加 並音 閑

之省 文也 王韻 口力切 並音 唐韻 青力切 集韻

○き

○キ

ハ幾

之音也 唐韻 居衣切 集韻 韻會 居希切 並音 機

一木

かみみく 将きり又古字也 集韻 墨帖 云秋を撰者きり云云 又云 雲を撰者きり云云 又云 雲を撰者きり云云

牙

かみあゝく將きり又古字也
墨帖云此を撰者考ふと云ふ
そ代はをきんわるへんハおもえり也

牙

牙

牙

牙

牙

牙

已上
秋菰

牙

○ 起

ハ 起

之音也 廣韻 正韻 墟里切
集韻 韻會 口此切 並音杞

起

かくみあゝく將
一牙起るなり

○ 支

ハ 支

之音也 唐韻 集韻 韻會 章
移切 正韻 音而切 並音厄

又 集韻 翹
移切 音祗

支

かゝのめ
將とす

○

大觀抄

釋父雄著 已下倣之
ハ 伎

集韻 韻會
並巨鎚切

音也
芟

上巴
 古今

𪛗
 𪛗
 𪛗
 並諸氏切
 音紙又
 [唐韻] [廣韻] [類篇] [韻會] [正韻]
 [集韻] 頸

あゝろ 枳
唐韻 廣韻 類篇 韻會 正韻
並諸氏切 音紙 又 集韻 頌

上ノ八

爾切 韻會 居矣切 音 健 集韻 韻

已 爾雅 翹 移切 音 岐 會 正韻

並渠建切 為建 古事記 建 依 怒 なる書

乾去聲 別万葉建 怒

る類也 日本紀 万葉等 なる書 此

略字を書たる なる書 是ハ なる書

此見ゆ貫之 依理行成 なる書 なる書

字 なる書 なる書 即伎を略 なる書

と書 なる書 なる書 なる書 なる書

なる書 なる書 なる書 なる書 なる書

事也。云々不得施之草部
と云ふをのちを

○予友清水濱臣云支ハ伎を略キ

此ハ早人云おるるを

一説ハ漢書郊祀志

註遼西令支師古曰令音郎定反支

音神祇之祇と云又齊語制令支註

令為縣在令西集韻支翹移切音祇

令支縣名なりと云を合考する支字

今為縣在令西集韻支翹移切音祇

上ノ九

令支縣名なりと考るに支字
自かゝるきの音有る地名乃時を
の訓いふとを其を借しや
○予友前田夏花云本居宣長古事
記傳にも支ハ志音なるをきの
倭字は用ゝまハ伎の偏を省く
ふと云一偏を省く書る倭多
一云又ハ古書は省字を用起倭

一二をいほ先古事記ニハリの弦正韻廣韻

戸田反集韻韻會を玄欽明敏

戸千切並音賢達の條

小見石村を石寸用明延喜神

名式小表石寸日本紀カミラスクリ小上寸主な

小々唐韻此尊切集韻廉尊切

正韻倉尊切並寸平聲

を省々る也万葉一已津物オキツ有ハ起音釋前出

の省文姓氏錄小委文連シツリノムラシ委文宿称

和名抄上野國那波郡の郷名ニ委

和名抄上野國那波郡の郷名は委

上ノ十

又因幡國高草郡の郷名小委文之

利と有皆倭王篇唐韻並の省文也

や復のあう法隆寺は飛鳥

る法華經義疏に題下は大委國と

志る醍醐の地蔵院は傳ふる古

書に志る書る物有日本靈異

記訓釋の中ふ波音釋はを皮とせ

一わと多く倍集韻補妹を音音韻唐



集韻 韻會 正韻

並於今切 音陰 をうと書くやん

ゆ此外健を建と書くやん 記紀万

葉小又多んらる省文字用一六

古へ小例多けは支は伎の半

を用ひはるそのやん

○ 長源梅るよ淳元懐の説をよ

見何るらる春海大観抄を取

云一ハれるやんさわやん

云一ハれるともさね。おれも

けのまはかき説也演臣の説

てまてういけく此はつふ一

はのき説をさちきと説くき若支

ハ支うとくよと松はあつて

は書一ハ寸音釋す之の字うて

部二出

茶葉なもろきいさよ免る心

もし馬の火をいふれえ残る

一寸二寸ヒトキニキと云ふおれちる佐支

とす空と自から別也と思ふ
心志をぬむ例も及みおそく

ハミルとそれと思ふとさうな

人の耳を聴く事ある也白石うまハ

奇廣韻 集韻 韻會 渠羈切の字ある

正韻 渠宜切並音琦

るよりいふはハミルと

○キ 幾 之省文也○

古抄本二

ト書リ 真澄蔵

本ノ古抄本今

キ

ト書タルハ輩
昔物語ノ中ニ
者ノ早卒ヨリ

本ノ古抄本今ナ
昔物語ノ中ニ
ト書タルハ輩
者ノ早卒ヨリ

上ノ十二

ノクセ
ナラン

○同文通考

白石著云幾和字省文也

○

伊呂波字考録云寺嶋翁ハキ即假

字ノキノ字ヲ取ト云万葉色葉ニ

ハ書ト書ト云是モ貴ノ草書ヨリ

取トイハ、遠カラシ

○

大觀抄云キハ貴ノ草書ヨリ来レ

ルナリ

○久之部

○日本紀通證

谷川士清
著下倣之

云伎省久或

幾草變

○

真澄按ニカク種々云レトキハ固

ヨリ幾ノ字也サレト已一説アル

ハキハ猶幾ノ真字ヨリ来レルニ

テ戈ノ三残タリトセハ如何アラ

ム猶考ヘシ

○

く

○計之部

計

計

計已上

計已上

○希希

○遣遣

○計

○計

○計

繼

計

計

計已上

○希

希

之吳音也廣韻香衣切集韻

希

之吳音也廣韻香依切並音晞

○遣

遣

之吳音也廣韻去演切正韻驅演切並音縊

切之
正韻
驅演切
並音
縑

上ノ十四

○氣才

二才二才

三才
已上
秋菰

介个

个
个
个
个

今
今
今
已上
古今

遺 走 走

かく 子 如く
將を する

子

氣

韻之吳音也唐韻去既切並音

气

氣氣氣氣

如以
糟以

13

八
介

之吳音也 **唐韻** 古拜切 **集韻會** 正韻 居拜切並音

戒

今
今
今

かゝる事を以て
人かかゝる

今
 と松ある
 字とあり
 今
 と松より
 心とあり
 本字の字とあり

を
し
れ

ふたなり



同文通考卷八

之吳音也
唐韻
正韻
呼霸切
集

の字

八兮

集韻
韻會

子字也云

介の字、此外、

今
日
の
今

廣韻
集韻
正

尋ねるおやこ

記妄説あり

五十四

音吳

五

已上
秋菰
こ
今古

○古

二七見ユト云リ又通ス

○
三

○
工

2

ハ
己

之吳音也 **唐韻** 居擬切 **集韻** 會荀起切 **正韻** 居里

音切並

2

己

2

五カ

人將

じつは書くはく書かれりなり
らうよ下の字へはくく時のる也

まろきそ

○ ㄥ之部
七
ㄣ
ㄤ
ㄨ
ㄩ

已上
秋菰

○

コ

ハ

己

之省
父也

○

真澄按二貝原氏工

唐韻古紅切集韻沽紅切並音

公ノ字トセルハ誤也ソハ白石毛

摠十キヨレ云置リ又谷川士清居

之吳音也

廣韻九魚切集韻

省父吳

韻會正韻介於切並音車

音也ト云レモヨルヘカラス

○

ㄣ

○

サ

○

ㄣ

ハ

左

之音也

唐韻

正韻

臧可切

止ノナヒ

○
サ

七

ちちとせ

ちてちてち

ἔχεται

ち ち ち ち

やゝやゝ

已上
古今

○ 侂 方 方

古已
今上

○
x

左

之音也 **唐韻** **正韻** 臧可切

集韻
韻會
子我切並音旼

[illegible]

此稿不書
乃
上

策を忘る者なり古人

いあれをよく思ひ廻るに魚さかなを
かきとるなりはきゆ急いそなり候

字彙編小部
之論一
於什少

○ 吳音也 廣韻

章也
七切

韻會 正韻 止

野切並音赭

八尋原抄を引くことと造

切
集韻
韻

毎言と誦一たるハ心付ル心英

一、（一） 強さ
な

之音也 **廣韻** 則箇切 **正**
韻子賀切並虎去聲

依
法
市

かゝる
も也

廿

ハ定説ナシ
○古抄本
ルハ書
文ノ省也

草

唐韻 采老切 集韻 在早切
韻會 正韻 采早切並音噪 薩

集韻桑割
切音撒
臧
唐韻昨郎切
徂郎切並音鐵
正韻

散

廣韻
韻會
蘓早切
集

茶 吳音

切音撒
藏
唐韻昨良切
徂郎切並音鐵

上ノ十八

散
廣韻韻會
早切並音傘
茶
吳音也集

韻直加切
正韻
御
艸
唐韻采老切
正韻采早切

並音
將
吳音也
廣韻即兩切
集韻

○真澄按二白石云藏散等ノ省文二

テ其音ヲ假ナレ日本紀二ハ

藏ノ字ヲ用ヒ万葉倭名二ハ散ノ

字ヲ用フ全長云薦信ハ草ノ上ヲ

取寺嶋翁ハ薩ノ字ノ上ヲ取万葉

色葉二ハ茶ト書万葉假名遣二ハ

廿ハ艸ノ畧ト云釋文雄云廿ハ薩

ノ冠也又谷川士清云辨辨之同字省文

吳音澤元愷云草字頭也爲薩頭亦

通云如此云子イヘト必竟定タル

考證ナケシハ暫疑ヲ存スサテ佛

經二菩薩ヲササト畧字二書ヲ世

俗ニテサハボサツト呼ヘハ薩ノ

俗ニテサ、ボサツト呼ヘハ薩ノ

上ノ十九

字トモ云マホシケレト猶此字十

ラス令暫ク草ノ字ヲ近シト也ム

又元愷云古者多作戈亦龙字草省

也ト云レフ春海云古人ノ筆跡ニ

才唐韻昨哉切集韻字ヲ常ニ

正韻牆來切並音裁

才ト書リ片假字一體ニ戈トアル

モ才字也イカテカ龙ノ字ノ草十

ラム清水濱臣又論テ云戈ヲサノ

古假字ト思へルハ痛僻事也古キ
書トモ二戈ハ皆也ノ古假字ニレ
テ決テサノ片假字ニハ非スサハ
匕トコソ古ハ書未タレ戈ハ杵ノ
草體ノ省文匕ハ龙ノ省文也ト云
リ真澄力藏本古抄本今昔物語江
談抄等ニモ戈ハセノ假字サハ匕
ト書リ春海カ才ノ全字ト云レモ

ト書リ春海力才ノ全字ト云レテ

上ノ二十

誤也

○之之部

之之

さくら

三

一一一

已上
秋款
今古

秋菽

しし一一

○
1

一
熱
之

之

かゝの如し
と聞き

之書

○
志

志
八
志

志
志
志
志

二の
子如く
將

之音也 **唐韻** **正韻** 止而切

集韻
韻會
真而切
並音枝

之音也

吏切 **正韻** 支義切 並音 隸

志

巳上
古今

○志士

志士
巳上
秋款

志士
巳上
百重

志士
巳上
百重
古今

○レ

ハ之

之全父也
○古抄本之

ト正ク書
リ又真澄

力藏ノ古
抄本ニ

トモ書
タリ

○真澄按ニ白石之ノ變也契冲之ノ

字ヲ片假字トナシテ書ル也釋父

雄ハ之ノ草書ニ作ルヨリ也谷

川士清毛之艸變如之遶ト云ルゾ

ヨキ澤元愷省進

唐韻
集韻
韻會
正韻
並郎反切音晉

之ト云レハ最謬也古抄本ニ之

ト正ク書タルカアレハ之ノ全字

之ニト云レハ最謬也古抄本ニ之

上ノ二十二

ト正ク書タルカアレハ之ノ金字
十ルコト明ナリ片假字ト云カラ
ハ省欠ナラ子ハナラ又ト思ヘケ
レト既ニ白石ナトモ子凡寸子ナ
トノ類ハ畫少キ欠字故省欠ナラ
スレテ片假字ニ仕フ由云レタリ
契冲力片假字ト云名ハ多分ヨリ
ツケタル名ニテ稀ニハ金字モ有

○寸之部

寸 古寸重
今寸百

○春

春

春

春

ト云ルソ穩十ルヘキカタク十二

説フ云立ル時ハ返テ誤出クヘキ

ナリテ

○

す

す

○

ス

ス

○

す

ハ 寸

之吳音也 唐韻 集韻 倉困 切 韻會 正韻 村困 切 並村

去 寸 寸

のくみおるく將を
寸と書へきと坂を

くすじ松の下へ長く引くこの文
字へ連まる時の勢を松と書く

十

とすに松は下へ長くするものなり
字へ連なる時の勢を於てする書

才

已上
秋菰
才

去

已上
古
去

已上
重
古
去

○須

以

已上
古今
以

○數

○

習へる也
外ハ俗字
ハ春
之吳音也
韻
韻會
樞倫切
並蠡平聲
昌屑切
集

春
か
来
来

○

唐韻
集韻

並兼咒
切音綬
能字
思
誤
禮
人
多

白石
之
壽
字
令
長
之
壽

俗字
之
壽
字
ハ
春
字
ナリ

釋父
雄
之
ハ
壽
澤
元
愷
云
者
壽

和

あれれれ

己上
古今

則とけのゑ

あ

あはれと申せは世に及ぶものと云ふ

則と以てのあ

○

い

ハ 須

之吳音也 廣韻 錫命切 集韻 韻會 詢趨切 並音需

須 須 次 次 次

かゝつてハ 是れ也

古人にぞ稱ふあゝとて書一のいふとく似て社をそわつちハ偽

字數表に委く海一おろし

○

あ

ハ 數

之音也 唐韻 所矩切 集韻 爽主切 並音數

あ あ

あ

あゝと稱ふ是れ古人の書よとの字と

又連字とてれと稱ふはあゝの字よとてはれを偽字數表

小論
於此

○

ス

ハ 須

之省文也大貝ノハ之
足ヲ取リ○又ハ吳

音也 唐韻

集韻

ハ

同上

寸

古抄

本二
出ツ

○

澤元愷云寸者尺寸之寸狂草為寸

用之省部者非也

真澄按二白石力ハ寸共管家之

陳點圖二出ト云レ二テ明也寸

傳點圖二出ト云シシニテ明也寸

上ノ二十四

○曾之部

○登之部

○冬之部

○世之部

ぜやややぜ已上
古夢

○吾秋
款と

ととととと

ハ全字ナレハトテ片假字二用

ルハワロレトテ九愷力論也ハ

誤ニテ前條白石契沖ノ説ヲ舉

テ委クイヘル力如シ

○ぜ

○や

○せ

ハ世

勢

せせ

かくみめく
勢一勢れ

之吳音也廣韻舒制切集
韻韻會正韻始制切並音

上

已上
古今
重

○勢
力

力

力

已上
秋款
力

○セ

ハ 世之
古字 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

○勢

ハ 勢 之音也 唐韻 舒制切 集韻

勢 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

○セ

ハ 世 之省文也 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

○曾之部

○

ノノ
省也草體

卷之二十四

そそそそ

ろろろろ

古
今

○楚

○所
丁
丁

下
下
秋款
下

己上
古金

○
三

○
シ

○ 子 曾

曾曾曾

3

子也一沙二也三心四る五あ六は
なれを七あ八る九偽一〇字一一類一二類一三小一四論一五亦一六今一七

○ 楚

抄抄

之音也

唐韻

昨稜切

韻
韻會

徂徠

切並音層

かゝる如く
一冊了。又

燈書といふをく書さけく
 より於のはくく一巻をたせと

之音也

阻切

並粗 正韻

創舉切
上聲

丁卯年

○ 不 八 所

之吳音也唐韻疏舉切集韻會爽阻切並數上聲

取 所 取 不 かくのぬ へ

とくかたり 同字なり

○ ソ 八 曾

之省 文也

○ た

○ 夕

○ た 八 太

之音也集韻他蓋切音汰

太 た

○ 太之部

た た た

た た た

○ 曾之部

形也

た 已上
古今

○多 多

已上
秋菽 今古

已上
重百

已上
重百

已上
重百

已上
古今

○堂 堂

ハ

多

之音也 唐韻 正韻 得何切

聲

多 多

かゝのあゝと轉 と松よ弦と
をり古人の書よ さくまゝに

を及 と書きたる の字とさふ
人乃 をく いふ の 本 を み 守

法をまされ
ふれおれ

○美濃梅は僧令長ハ茶葉と茶抄を

を退

集韻 韻會 正韻 並

こと松ふ家と いふ と いふ と

已上
重百

上ノ二十七

共書り同

切韻 集韻底朗切 正也 以說其誤れり

○知之部

ち ち ち ち

ち 已上 秋菰 ち ち

ち ち ち ち

ち 已上 古今

○夕

ハ 多 之省文也 太 共書リ同 古抄本 文通考二

菅家ノ點図 太 音釋已出 二モ有由云 全文也

○

ち 音釋已出 全文也

○

千 並五字讀 一 略 下 不 々 一 十 非

○ち

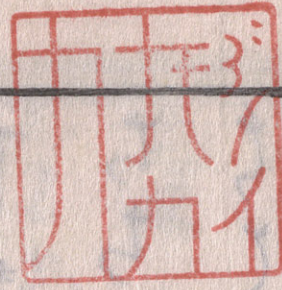
ハ 知 之音也 唐韻 陟离切 集韻 韻會 珍離切 正韻 珍而切

並智 平聲 知 知 知 知 知 知

かゝのめく 弱 事れり

○千

ハ 千 之全字訓也 唐韻 蒼先切 集韻 韻會 正韻 倉先切 並



音降○和名抄云
鹽和名久呂豆千

○真澄按二澤元愷云千亦知也或為

千字非矣省文無用全畫者ト云リ

コハ谷川士清が知省文或千全體

ト云並正字篇ノ説ヲ取タレト非

也白石契冲貝原並二釋文雄等皆

千ハ即千ノ字ノ全文十ル由云レ

タリ片假字ノ中二モ千寸子十

ハ畫少キ文字ニレテ全文ヲ以片

已上
秋菰

つ つ つ つ

つ つ 已上
古今

○徒 つ つ つ

つ 已上
古今

○津

あはれはかりしあはれのみふ云

あはれはかりしあはれのみふ

あはれはかりしあはれのみふ

あはれはかりしあはれのみふ

あはれはかりしあはれのみふ

○同文通考云懷賢宿祿の説は低字

此云揚れ始れりといふは世に

和神切字後の漢代の先ふ文字傳

和神切會館の近代の文庫文字傳

上ノ二十九

羅祿を見る所なり大藏省の蔵書

子中_ニ肥人乃字六七投付可智

天字皆係字を因ふ天字いふに明

たのしくする事有乃川字の字を明し

見西京雜記卷之五

きんぐり
釋日本紀
證梅小吟

釋日本紀
不見於

謹按小

泉大納言為重々の本朝書籍目錄

小
志瀛梅、本邦書籍目録の作者
を白石ハム、のへて所を予

友前田夏花編く之本朝書籍目録
大永亨十一年大外記清原業忠の
集るる抄れより古本體源抄よ云
里六社を將軍普度院義教の命よ
より注進しある也新井氏を以
泉富富々れする抄れあり
此泉家の書籍目録と云く之抄
ハ謠也為富々れた中ね為々々の
妻嗣うく明應六年十一月二十日
薨と云く形か受永亨よりある
抄れ禮肥人書云とものところあり
あり

市々を以書き伝五卷ありは後
小治より六七枚計大蔵省に在書の

小後よ六七枚計大飛省れぬ書の

上ノ三十

中ふ然れども也肥人書とも肥の國
の國ふ然れども也人あ然れども葉の
中^{十一}卷 肥人と書く人とは訓
ふ然れども人書く人とは高麗國の
書を云ふ今朝鮮の國中ふ
用ふ所れ文字も然れども字はくあ
るを讀文と云ふなりと朝鮮と云

そこの三韓の地を合する國あれ
ハ今其國は用ゐる所は文字有る
古より其俗ある一ト云ふを言ふ
所せよ其國は其社一文字家國は
傳ふと記さる書也云ふと云ふ
みそ社も肥人書は思ふと云ふ
所字と云ふ家國は用ゐる所は
慣の流より云ふは書は其國の

賢の説よりわくは書字の承傳の

偽字れ始るる云一説

予友前田夏彦同文通考を編く

云肥人書紙偽字の始云云

其書を云う也釋紀に此説の

上より一説を載く偽字ハ至應

神天皇御宇遣使新羅招来文人

僅習文字然則自彼御時可有之

と云説よりわく肥人書を始る

云流ハ用ノ一ノミナリト云
魚ノ

○ 文源同文通考の字條を合撮す

又同書より泉家の書籍目録

書

名れる事々々小蔵人可書云
一ノ編おろし

る物云蔵人とは今の薩摩國の

人云々此れを名お一國切は通

用云々又字云々と見起是とい

用をうへ文字をうへと見起是とい

思へる肥人書を於肥前肥後の
國中より一自かゝ一體の文
字なりあゝむ春海と豊後國
人の語よりえりて文字あり
を肥後文字といふなり云々然
れも肥人書ハ肥前肥後の國人
能文字なりある明也白石の記
人をいふものなり朝鮮國と定云

新を以て強ひる及なり

○廣澤云門

唐韻莫奔切 集韻 正韻 謨奔切 韻會 謨昆切 並音捫

○俾呂波字考錄云篤信闔

唐韻 集韻 韻會 都豆

切 正韻 丁候切 並兜去聲 の字を以て或云門或云

津

訓也 唐韻 將鄰切 集韻 韻會 正韻 資辛切 並音纂

○澤元愷云「破草不知捫或云門字

已無音例其為門」唐韻 都豆切 集韻 丁候切 並音闕

亦奇怪如為川字豈謂省之作以再

亦奇怪如為川字豈謂省之作以再

上ノ三十三

變耶契冲謂川字帶咨音訓是草體
取訓亦例之取魚也

○春海云此字

川之字也

古書ハ續日本

紀續日本後紀万葉集等ハ各一處
付用之留也有之傍訓ハ此
尤疑ハ一催馬樂風俗等ノ古譜ハ
多此字ハ此諸譜ハハ一及
二出之書ハ此ハ古書ノ為

津と成る一契沖流る川は津の
刻とていへども正しき説とされ
た後難くはる同文通考ふ川は皆
同字とて川とへる肥人書の子也
字のなりき是ハ釋日本紀所説の
よとられたる也ハ説定説也とて云
難くわはは支字別への字と云
おも知るく又古人所著書に依

おもひつゝ又古人の字を書す

字の中よつつかの多きこと入
るゝも多きことゆれゝたゆゝは力
字を肥人書の文字を用ひ来れり
と云むし理もたよあはれは白石の
説を姑く廢止しこの如又云ふに
川字も肥人書の字ならし續紀續
後紀さなり國史より用ふる文字を
を用へるゆゑをたれを夫ハ

始ハ津都等の字なりと後人の
或る書改たるよりなる事案
同く志る事但催馬樂等の諸
譜ハ俗間通用のものなり肥人書の
字を用ふる事ありあらず
予友前田夏花云同文通考又ハ
ハ昔より傳來れる和字ありと
俗字より取用なりと云ふ事

何字も取用をいふとある

○ 肥人書ありといふれども

一を新井白蛾といふ人通考に

追記し一を肥人書といふ處に

○ 出禮え白名れ誤を是誤といふ

○ 俗者なり釋紀にも乃川能二字

を云く一の字の出ハ何れと

○ ありたりある紙白蟬の文等

○ 思誤するある一はるを村田

氏は白石のひそけり

格に記されしはつとや

○ 片

ハ 徒

之吳音也唐韻集韻韻會正韻並同都切音塗

徒 徒

かゝのあゝと將きゝれるものあり

○ 津

ハ 津

之訓也唐韻將鄰切集韻韻會正韻資辛切並音纂

○畧木和名抄云津四聲字苑云津將隣切和名豆

津

津 津

かゝと將きゝ

○ ツ

又同文通考二ト部家二川傳レ処ノ經點ノ四二

トモアル由又真澄力

ハ 十 七

○

ツ

又同文通考ニト部家ニ川
傳レ処ノ經點ノ図ニ

上ノ三十六

トモアル由又真澄力
藏本古抄本今昔物語

ハ

トモ
書リ

○

真澄按ニ此字モ分明ナラサレハ

諸説ヲ舉ルノ三但平假字ノフト

同字ナラム別字トセシ説ハ當サ

レ共暫並ヘ舉置ノ三從ヘカラス

○

同文通考云ツ肥人書ノ川ノ字也

○

伊呂波字考録云ツハ図

之吳音也
唐韻集韻

韻會正韻

並

同都切音徒

ノ畧トモ云ヘキ歟

○大觀抄云ツハ罔字ヲ取ナルヘシ

○日本紀通證云川全體訓或州唐韻

職流切

集韻

韻會

省文州音都

之由切並音周

真澄按二此州ノ字ノ畧ト云レ

レ毛理聞ユレト六畫中ニテ中

間ノ三點ノ三省テ殘ノ三畫ハ

力リ取用ヒレナト巧ニ過テ上

古ノ質朴ナル心ニテ省文也

古ノ質朴ナル心ニテ省文セシ

上ノ三十七

サマトモ思ハレス片假字ト云
ルモノ古六體ヲ作出セシ如ク
頭ヲ頗ケテ考出セシモノナラ
ハコソアラメ固リ朝暮書ナル
ルニ自然ト畫ノ省畧セルニ
テ如何ナル命ニ依テ如何ナル
人ノ考ヘ省ルト云モノナラサ
メレハサル巧ハ有ヘカラスオ

モハル猶可考

○澤元愷云ツ是圖之作凶之省也

○予友前田夏蔭云乃川ノ假字肥人

書ヨリ取用フト云説ハ新井氏釋

日本紀ヲ引テ始テ云レレヨリ已

後ノ学者サルコト、諾ヒテ春海

翁モ此説ニ從レレハイニレキ僻

事トソ覺ル令按ニ釋日本紀ニ肥

事トソ覺ル令按二釋日本紀二肥

上ノ三十八

人書ノ事ヲ云レ條二其字皆用假
名或其字不明或乃川等明見之ト
有ヲモテ新井氏ハ乃川ノ字ヲヤ
カテ肥人書也ト淺ハカニ心得テ
サテ中國ノ假字ニモ此字ヲ用ル
ハ彼ヨリ出タルモノソト強テオ
シ極タル也ケリ是ハ釋紀ノ文ヲ
惡ク心得ヒカメタル者也乃川ノ

字ハ古ヨリ中國ニ書習ヘル假字
ナリヲタマハ肥國人モ此等ノ字
ハ中國ノ通字ヲ用レ故ニ其肥人
書ノ中ニハ書載タルニテ其字不
明ト云物ハカリコソ肥人ノ本國
ノ通字ニハ有ナレ天下ナヘテノ
國々ニモ通ハレ用ヒ又肥人ノ國
字ヲ朝廷ニテ假用ニ事ハ物ノ理

字ヲ朝廷ニテ假用ニ事ハ物ノ理

上ノ三十九

ニ於テ有ヘクモ非ス新井氏ノ力
ク思誤ラレタルハ万葉集ノ謬訓
ニ拠テ肥人ヲ高麗人ト心得ラレ
レ故ニ皇國ノ古高麗ノ字ヲ假用
ツル者ト風ト思違ヘラレレニテ
其考ノ本ツク処既ニ誤ナレハ其
說都テ徒ラ事ト成レ也夏蔭考ル
ニ日本紀仲哀天皇四十六年紀四

十九年紀等二州ノ字ヲツノ假字
二書ル事有釋日本紀秘訓二七州
音都ト見ユルヲ以思二川ハ州字
ノ省文ニテ早稀ニ用ル假字ナリ
レ故ニ續日本紀續日本後紀万葉
集等ニモ用タルナラムト思ハル江川
ノ字ニ固リ音訓共ニツト訓ヘキ由
更ニ十キ事ナレハ是ハ必州ノ省

更二十キ事ナレハ是ハ必列ノ省

上ノ四十

ナレヘキ也サレハ此字ハ中國ニ
用ルカ本ニテ彼國人ハ中々ニ是
ヲ假用ツルニコソアレ肥人書ノ
中ニ見エタリトテ則肥人書也ト
推極ヘキ物カハ甚理ナキ事ト云
ヘシ又春海翁ノ說ニ國史万葉等
ニ川字ヲ用シハ本ハ皆津都ノ字
ナリケムヲ後人ノ書改シナラン

ト云レシモイカニソヤ川字ノ早ヨ
リ世ニ書習ヘル假字ナル故自ラ
書交タルニコソ有ヘケレ續紀モ
續後紀モ万葉モ皆後ヨリ書改シ
ナラムトハイカテカ云ルヘキ催
馬樂譜ニハ此字ヲノミ多用タル
ハタ古ヨリ書馴タルニ任セシ成
ヘシ國史ニハ用ヘカラス夫ニハ

ヘレ國史ニハ用ヘカラス夫ニハ

上ノ四十一

用ヘレト云レタルモ強言ト聞ユ
必竟春海翁ノ說ハ肥人書也ト云
レ新井氏ノ謬說ニ從ハレレ故ニ
井ル僻事ハ出来レ也又谷川士清
力說ニツハ川ノ全體ニテ訓ヲ用
ルニヤ或ハ州ノ省文ニテ音ヲ假
ル也ト二様ニ云レハ川ハ州ノ省
文ニテ音ヲ用ル假字ナル事ヲ思

サリシニテ未レキ説也サテ此假
字川ヲ以ト書タル草ノ手ヨリ
ツト轉訛セシモノナルヲ漸本字
ヲ忘タル後ニハ自カラツ以ト並
書テ別字ノヤウニ思ヘル也片假
字ノツハモ又此字ヨリ轉ル事論
ヲ待スシテ知ヘシ
此說平假字片假字通論スサ
レト省文ノ事ヲ專論セシ故ニ
今片假字ノ論中ニ出セルナリ

今片假字ノ論中ニ出セルナリ

真澄按ニツ字ヲ定カニ州字ト

モ云難キ由ハ前條ニ論置リサ

テツハ兩字肥人書ニアラサル

ト又肥人書ト云モノ、論ト並

ニ白石春海思誤レリサルハ今

夏蔭又オノレ真澄カ前條ニ論

シオケルヲ見テ知ヘシ

○天之部

○
フ

ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ

ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ 已上 秋菽

ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ

ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ

已上 古今

○亭

○テ

○て ハ 天

之音也 唐韻正韻 他前切 集韻韻會 他年切並腴平

聲

ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ

かゝ將を 里古人の

書上の字より連れる勢より

ㄣと書るㄣと書るㄣと書るㄣと書るㄣと書る

えゐるㄣと書るㄣと書る

ㄣと書るㄣと書るㄣと書る

○ 天漢梅と或云てハ天とてゝゝゝ

別也ㄣハ氏

唐韻丁禮切 集韻 典禮切並音邸

の古

字豆を豆とて將をよハ一礼

字豆を豆とと稱するは

五八四十二

上ノ四十三

空天のふくと將に來れるかゝ道

一五五

○
子

亭

之音也 **唐韻** 特丁切 **集韻**
韻會 **正韻** 唐丁切 並音庭

高字字

かゝの如く
將に來き所

A circular ink stamp from the National Diet Library, Tokyo, Japan. The text "National Diet Library" is curved along the top inner edge, and "Tokyo, Japan" is curved along the bottom inner edge. The center of the stamp is blank.

テ

3

天

○省文也
古抄本
于
古抄本二
又真澄藏

天

全卜有八
爻也

真澄按二古人

多ハ天

省文卜云

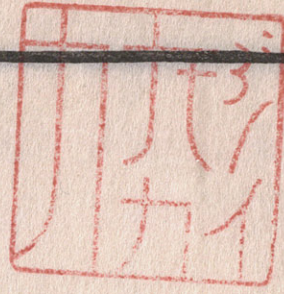
リ然ルニ澤元愷力室町時代諸鞍

日記ニチト有ヲ引テ天ノ省チナ
ルヘキヲチト相混易キニ依テテ
ト書ナラント云シヲ春海論シテ
足利時代ノ書ナラハ證トシ難シ
其筆癖ニモアラムテハ白石底唐韻
都禮切集韻韻會正ノ省父ナル由
韻典禮切並音邱
云レシ力當レリト云シヲ清水濱
臣又論テ筆者ノ癖ト云テ破セラ

臣又論テ筆者ノ癖ト云テ破セラ

上ノ四十四

レレハ如何アラム又白石ノ説ト
テ底ノ字ヲ舉ラレレハイ三レキ
僻事也底ヲイカテトモチト
モ書ヘキ若古ヨリテトモ書ハ
ソアラメト云リサテ此字濱臣カ
論最當レリ予カ藏古抄本ノ中今
昔物語ニハ既チトハカリ有テタ
マタマテト金字ニ書タルモアリ



又江談抄ニハ天トノ三書リ天ノ
省父ナレ事疑ヘカラスサレト古
人ノ説ナレハ左ニ舉置ノ三必從
ヘカラス

○同父通考云庭

唐韻特丁切 集韻韻會正韻唐丁切並音

亭底等ノ省父或ハ天ノ字ノ省ト

モ云也又亭ノ省父ノ由云説アリ

○

和字正濫抄

釋契冲著

云手

訓也唐韻書九

切

集韻韻會

正韻

始九切並音

次

○和字正濫抄釋契冲著云手訓也唐韻書九

上ノ四十五

切集韻韻會正韻始九切並音首○和名抄云攝津國豐嶋嶋歛

○伊呂波字考錄云篤信八亭ヲ取若

クハ庭底等ノ字ヲ取二非儿歛

○と

○ト

○とハ止

之訓也唐韻諸市切音芷○和名抄云說文云麓山足也不毛止止止と

とかくのめく

○止之部

ト
と
と
と
と

已上
古今

○登
ル
ル
ル

已上
秋款

已上
重百

○ 五之 四

22 23 24 25
 26 27 28 29

○同文通考の世の人土

唐韻	魯切
正韻	集韻
他	韻

會統五切
並吐上聲
孔字のそとに
ハ併

只彼の象を乞ふ也

○廣澤云土の字

○ 倂呂波字考錄之尋源抄正字篇二

ハ土字と凡

日本紀通證云止省文或苦

訓也
唐
韻朱廉

七
集韻

韻會

正韻

詩廉切並

音店

○和名抄云 苦士 廉反 和名度萬

切集韻韻會正韻詩麻切並音店
○和名抄云苦士麻反和名度萬省

上ノ四十六終

謝字友卷之七

○澤元愷云草體無有取于訓者故と

者土字破草又轉為と耳為止草者

非是

是誤也土字も例あるを強

假する音訓の例あるを強

くする誤るを強

○ハ登

之音也唐韻集韻韻會
正韻並都騰切等上聲

冬 冬 冬 冬 冬
 かく 転
 せり

○
 ト
 ハ
 止
 之省
 文也

假
 字
 考
 卷
 之
 上
 終

21
11
0093

十モジ
 シキ
 七五付

五八十六

58017

假字考卷之上



2
1
009

国立国語研究所



1001090156